

木村文助研究 No. 2

通 信 2000、11、14

櫓

高一 新栄 とよ

いつかの冬のことであった。私はまだ小さい時であったから、はっきり分らないが、家の兄さんが友達と三人で遊んでいた時、櫓が来たので、二人の友達は、兄さんの知らない中に、家の小さな櫓を持って行ってその走って来る櫓に付いたら、馬追いに怒られて、驚きのあまり、其儘、馬追いの櫓に付けてやったのを、家の兄さんが見てその櫓を持って行かれると大変だから走って行って取ろうとした。すると馬追いは兄さんが付けたと思ったのであろう。いきなり兄さんの目の下の方を、あの鋭い手綱で叩いたので、痛いから逃げたら、運悪くも川の中に落ちて着物はどっぷり汚し下駄は流れた。下駄はよその人が取ってくれたが、兄さんはおいおい泣いて来たので、母達は兄さんからその事を聞き、早速馬追いを家に連れて来たら馬追いはあやまろうともしないで、庭にぼっかりとして立ってあった。それから家の父や上の兄さんと馬追いと三人で大声を立てて争ってあったが馬追いがきかないので、上の兄さんが大変怒って「そうぐずぐずしているんだら、分署にあべ（行こう）」と引っ張る様にして連れて行こうとしたら、今度は馬追いも怖くなったと見えて「分署に行くことは許してけれ」とか、色々なことをいって、何度も手をついてあやまったので、許してやったが、外には黒山に集まって見てあった。怪我した兄さんは泣き泣きご飯を食べながら「飯へば目の所痛くて喰れねあ」というのであった。その後、其馬追いを二三度見た。見る度にこの人が内の兄さんを怪我させた人だ、憎らしい人だな、兄さんの代りに妹が、警取ってやりたいなあ、ああ憎らしい人だと思つと、心の中でもう飛びかかって行きたくなるようであった。友達の為兄さんは、いらぬ（しなくともよい）怪我した。何、兄さんでも付けたのであるまいし兄さんが櫓を取りに行った計りで痛い思いをしたと思つと、友達を憎くて仕様がなかった。又、いくら付いたって子供の事だもの、そんなに怒らなくてもいいと思つ。こんな人は、どんな恐ろしい心を持っているであろう。私は小さいながらも兄さんが可哀想でならなかった。今でもその人をふむくってけたい（踏み蹴ってやりたい）気がする。

評 北海道の大野小学校からはいろいろと傑れた作が来ました。

新栄さんの「櫓」を入賞にしました。「櫓」はありのままをよくかき上げています。とかく年級の上の人は下等な表現にかぶれたり、こまっしゃくれた、かきかたをします。殊に女の人には、齒のうくような表現をする人が多いのでうんざりしますが、この「櫓」などは、どこまでもうぶうぶしていて一寸もいやみがありません。

「人が……見てあった」という様な変な言葉づかいもありますが、このくらいに出来れば、まず上手に標準語で綴っていると云わねばなりません。実質的にいえば事実をよくつかんでいる上に言葉によけいな飾りが無いので、すべてがはっきりと、目に浮かびます。馬追いたちが憎くてたまらないところなどは、しまりの足りないかきかたですが、その代わり子供らしい、女の子らしい感情がまざまざと出ています。

*文は「村の子供」作品から採り、「赤い鳥」1922年・大正11年8月号に載った最初の入選作である。漢字、仮名遣いは現代風にし「あべ」、「いらない」の()は「村の子供」のままである。また「喰」には(か)のルビがついている。

*「評」は赤い鳥鈴木三重吉が毎号入選者に書いている。



「村の子供」序

自校文集「村の子供」(謄写)を編んでからもう三年の月日が流れた。

子供等は之を土台としてけなげにも奮闘を続け、小さな自己を築くに忙しかった事は私にとって本当に涙ぐましい程の感激であった。其の心の跡は其まま過去として葬り去るには余りに惜しい。

こうして私は「村の子供」の続編を編むべく已むなくされたが、此機会をもって、一層の事、以上を打して一丸としたものを作り、遺憾なく頒たうが為、茲に印刷に附する事にした。

村の子供！何という淋しい名だ。

それでも、其處には子供ばかりの、田舎ばかりの、其處相応な世界が開かれて居て、夫に適わしい生活が営まれている。賑やかさ花々しさには乏しいが、静けさ長閑さの間に溢るる計りの純真さと、澁刺さが殆ど永劫に続く豊富を持って彼等を囲んでいる。そして彼等でなければ味到し得ないこの世界の鍵を、自らの力によって握った彼等は、其幸福に恐悦するであろう……と共に「君達よ」と都会の友だちに呼びかけずには居られない焦燥を感ずる。

田舎の子供の綴り方は田舎の土に咲いた花である。「地理」に根を下ろし「歴史」に育てられて、こう咲くより外、どうにもならなかったのである。

青い山の中に、稲のそよぎの中に、鳥の歌をきき蛙の声をきき、石や草花や棒切を玩具とし、藁葺の家に親子膝つき合わせて育てて来た……そこにはそこにしか見られない心の生活があった。

電車に乗り、石造の家に住み、水道の水をのみ、セルロイドやブリキの玩具で育てられたとは又違った生活があった。

子供は大人になる準備の人ではない。大人とは異なった人である。子供は独立した子供の生活がある。真にすばらしい驚異すべき世界がそこに開かれている。そして愛が、純真が、如何に放胆に澁刺に遍満しているかを見る時、吾々はそこに耻づべき吾五尺の体を発見し、寧ろ跪かん心を抑える能わざるものがあるではないか。こうした所から生まれた芸術が大人のそれより、低いとどうして言われよう。吾等は其、人の大小を見ず、只其純真の輝きを見るのみである。

全国の綴り方も彼等には珍しい音づれとしては響くが人馴れしない彼等の胸を打つ力は弱い、彼等は真に此處にのみ彼等だけの本当の芸術の世界を発見する。然し其芸術は——全国一般と——共通の根をもっているものであるから、序々に其範囲を広めて行ってやがては一致する、今其途上にあるのである。此意味に於いて私自身の仕事として彼等の出発に躓るものは此「村の子供」しかない。

此集に現れたものは思想的には真に低級であり、智的に貧弱である。語彙も不足、漢語にも熟していない。然し夫丈に生まれた儘の素直さ大胆さという強みがある。私はせめて、それ丈でも素直にいじけさせない^て育て^て哺んで行きたいと念じている、「功利」が伸べる「妥協」の手を勇敢に払い除ける、正しき事の前に何事も恐れぬ、勇気と純真の美しさを、永遠に彼等の貞操とし至宝として保たしめたいとひたに念じているのである。(7巻～9巻)

木村文助

*「綴り方生活 村の子供」は1927年・昭和2年に東京から刊行した。序文に鈴木三重吉、田中豊太郎、そして上記のが載ったのである。89編の綴り方、最後に木村の論文で締め括っている。



ぶんぽけんと町長、教育長などと懇談会を開いた。「綴り方指導者木村文助の資料収集」についてもお願いしたところ前向きな回答があり、現在大野紹介のホームページに盛り込む準備中である。

「赤い鳥」と木村文助先生

大野町文化財保護研究会会長 木下 寿実夫



一九二〇年代、大野尋常高等小学校訓導兼校長として約十年間、つづり方指導に励んだ木村文助先生の顕彰活動を進めている。

当時、作家鈴木三重吉氏は、それまでの子供向けの雑誌に飽き足らず、児童文芸雑誌「赤い鳥」を東京で発刊し、素直に表現したつづり方を募集した。それと共鳴した文助先生は、指導作品を投稿し大正から昭和にかけて毎号のように入選させ計五十九編が載った。現

つづり方に方言導入

教育史飾る業績後世に

と校内の入選作、自らのつづり方論文も含め「綴(つづり)方生活 村の子供」を東京から出版した。鈴木氏が序文を贈っている。田

とまきと言わしめた。

斬新(ざんしん)な学校経営に当たると共に子供生活の課題を考えさせ、「内省力に満ちた子」の育成に

た。そこで当天野町文化



大野尋常高等小学校の児童と教員。後列中央が木村文助=1925年

注目した研究者が次々と論文を書いている。教育と地域活動に尽くした輪郭は明らかになりつつあるが、元の資料不足は否めない。

しかし明るい材料もあり、最近遠く鹿児島や京都の大学の先生から文助研究資料が届いた。宮城の大学でも研究している先生がいるという。また秋田の文化財研究者が「赤い鳥」に入選した作品を載せ「北海道の児童綴(つづり)方名作選」という本を出版した。

困難な時代、地域に根ざす教育に打ち込んだ文助先生の業績を今後も追究し、後世へ伝えることが私たち郷土史グループの務めと想っている。

文助先生は、今でいう村の社会教育を興し文化活動にも携わっている。執筆活動もおう盛で著した本や論文が多い。戦後彼の実践に



ふるさと講座 (大野町教育委員会)

綴り方教育と大野小学校 木村文助研究
01

素朴で自然な描写。
「この綴り方は、文学である...」

10月10日、大野町で開催された「生涯学習 ふるさと講座」第4回は、札幌大学教授・原子修氏を迎え「文学散歩 元大野小学校・木村文助 校長と村落児童文選」をテーマとした。

木村文助については、別文を執筆中であるので、簡単に紹介する。

木村文助は、大正から昭和初期にかけて綴り方教育を実践した大野小学校の校長である。木村の指導により、当時の大野の子供たちの「綴り方」(現在の作文)は、児童文芸誌『赤い鳥』(鈴木三重吉により発行)の誌面を飾っていた。

ここでなにより画期的だったのは、大野弁(方言、なまり)による文章表現が認められていたことである。後に、東北地方を中心に「生活綴り方運動」「北方教育運動」として広がっていく前のことである。



(右上)大野町中央公民館にて。(左下)木村文助の功績を知らせる案内板



講師の原子さんの母親は、大野町出身。『赤い鳥』に掲載された母親の綴り方を探る過程で、大野町文化財保護研究会からの資料提供を受け、今回の講師となったわけである。

「これは、綴り方というよりは、文学作品であると言えます。すばらしい情景描写です」。当時の綴り方文章に対する原子さんの評価は、まったく頷けるものであった。原子さんは、後に発展と弾圧の歴史を経ることとなった生活綴り方運動について、「これは、現代の地域おこしに通じるものです」。標準語と方言といった対比を越えて、「大野語・函館語の大切さを訴えています」と語った。

※「木村文助について 02」に続く

大野町文化財保護研究会

大野町の歴史や遺産の保護・掘り起こし運動をおこなう。町内の建造物・跡地などに、由来を示す案内板を大野町教育委員会とともに設置する。

『会報ぶんぽけん』『木村文助研究 通信』を発行している。

亀田郡大野町本町68
電話0138-77-8535

(第3種郵便物認可)

「木村校長」など6枚

大野町の史跡説明板

《本年度の設置完了》

【大野】町教委は約二年前から設置を進めている「大野町史跡説明板」の本年度分がこのほど完了した。説明板は、町文化財保護研究会(文保研)などの協



8月に新設された「木村文助大野小学校長と村の子供」

力を得ながら、町内の史跡などに設置している。一九八一年、町内向野に「大野養蚕場の土塁」の説明板が設置されてから、約六十カ所に設置された。本年度は九月までに、町内南渡の大野小に近い大野町郷土資料室前の「木村文助大野小学校長と村の子供」など六枚を新設。また、来年度は文保研会員や一般町民から、町内で亡くなった漫画家小山内童の町内本町にあった住居跡など、十カ所余りの説明板新設が求められている。

《日誌》

- 6月30日 木村文助研究通信を発行 (函館新聞社)
- 8月2日 「赤い鳥」と木村文助先生 (北海道新聞)
- 8月31日 木村文助大野小学校長と「村の子供」の説明板設置 (町教委)
- 9月2日 仏教大学岡屋先生が大野町郷土資料室に立ち寄る
- 9月16日 史跡説明板6基新設 大野町教委 (函館新聞)
- 9月 赤井千代氏所蔵の「悩みの修身」(木村著)をコピーする
- 10月10日 札幌大学教授原子先生が「赤い鳥・綴り方」の講演 (町教委)
- 10月11日 木村元校長を紹介 「生活つづり方」教育実践 (北海道新聞)
- 10月23日 町政懇談会で「木村校長」資料収集の協力を要請する
- 11月2日 「木村校長」など6枚 史跡説明板 (北海道新聞)

発行 041-1201 北海道亀田郡大野町本町68 木下 寿実夫

T・F 0138-77-8535

町文化財保護研究会(ぶんぼけん)会員 町文化財保護審議会委員

道文化財保護協会会員